

【学生フォーラム】

親と子どもの発達センター 学生サポーター活動 その2

岡崎女子大学 子ども教育学部子ども教育学科 渡邊レナ 細井夏花 田中香帆

【要旨】

昨年度から本学に設置されている「親と子どもの発達センター」で「学生サポーター」が結成された。この活動は、保育者として学生の経験に繋げるだけでなく、地域との連携を図り、地域の子育て文化に貢献することを目標としている。

発達センターの歴史を振り返りながら学生サポーターとしての活動について発表をすることでこれからの活動の向上を目指していきたい。

1. センターについて

本学に設置されている「親と子どもの発達センター」は平成二十五年に開設された。そして、実践力のある人材育成、親子発達研究、地域貢献活動の三つを拠点として自由開放日、みんなで子育て、子育て実践講座、発達に関する相談やハンドブックの刊行と地域・学生に根づいた活動をしてきた。また本学の学生が作成した「こころちゃん」もセンターのイメージキャラクターとして大きな役割を担っている。センターは「触れ合いエリア」と「振り返りエリア」の大きく二部屋に分かれている。一つ目の触れ合いエリアは0・1・2歳児を対象とした玩具の部屋となっていて、乳児が飲み込まないよう、大きめのおもちゃを設置し、カーペットや畳等おもちゃ以外でも楽しめる環境設定となっている。二つ目の振り返りエリアは、3・4・5歳児対象の部屋となっていて、考えることを楽しむ遊びや絵本を置いている。このようにセンターでは発達に応じた遊びに対応している。

2. 学生サポーター・企画チームについて

まず「学生サポーター」は令和元年度十二月の時点では、登録者数が100名である。学生サポーターは学生が「主体的に自らの保育の視点を獲得すること」を第一目的としている。主な活動としては、自由開放日に親子と関わることや手遊びや読み聞かせ等を実施している。その中でも主として活動している「企画チーム」により学生企画の運営を行っている。企画チームは月に一度ミーティングを行い、行う予定である学生企画の進行状況や終了した学生企画の感想・反省点等の共有をしている。また、年に一度の行事である「セミナー」や他施設の見学を行う「視察」について話し合いをしている。まだ二年目ということもあり、企画チームを学生主体の場として確立させるための話し合いも行っている。サポーターの活動として、主に三回の学生企画を行い、他施設の視察を行った。サポーターと分かりやすいようにエプロンを作成し、「サポーター制度の確立」を図った。二年目は企画委員の人数の増加ということもあり、企画の回数を見直し、五回実施した。

(1) 学生企画「おねえさんとあそぼう」

今年度は現時点で五月に「なりきってあそぼう」七月に「おとうさんといっしょ」九月は三日間の自由解放日を生かした学生企画、十二月には「クリスマス会」を行い、四回の学生企画を終え、三月に行う予定の企画も含め、年間を通して五回行う計画を立てている。

七月の「おとうさんといっしょ」ではお父さん同士や家族間のコミュニケーションを図ることをねらいとし、コミュニケーションを取りながら遊べるような「トンネル」や「飛行機」等の遊びを実施した。また以前の企画より学生から出た反省点を生かし、環境の構成として企画を行いやすいようにリハーサル時に部屋の真ん中に設置されている遊具等を部屋の隅に寄せ、布で覆い隠すことをサポーターにも説明する等、サポーターとの連携を図った。そして、効率的に広いスペースを確保し、子どもたちが企画に集中出来るよう、配慮した。さらに、体を動かす企画のため、水分補給の時間を設け、発達に応じて動きを変え、揺さぶられ症候群に注意するよう声かけも行った。

企画後は反省会を行い、学生同士で意見を共有している。利点や反省点を踏まえ、次回の企画に生かしていくよう心掛けている。

(2) その他の企画チームの活動

九月には、地域の保育者に向けたセミナーに参加した。そこでは、託児や受付、会場案内、司会等の学生ボランティアを行った。また、予算を利用して木のおもちゃをメインに扱っている「カルテット」というお店に足を運び、おもちゃの購入も行った。

さらに、多様な子育て支援を身に付けるため他の施設の見学も行った。センターは、大きな家をイメージして建てられていて、気のぬくもりを感じた。建物内は大きなガラス戸によって、どこからでも子どもの様子を確認することができるため、保護者も安心して過ごせるつくりになっていた。センター内は製作コーナー、セミナールーム、カフェコーナー、中庭、遊びの広場があり、子どもが様々な遊びをのびのびと行うことができるようになっていた。「親と子どもの視点」から凝らされた工夫は私たちも考えていくべき視点であるため、この視察を通して見直すきっかけとなった。

3. まとめ

このように、私たち学生サポーターの主体的な活動を通して、必然的に保護者の悩みを理解したり、保育者の子育て支援のあり方を考察できたり、実際の保育の場で自らの保育の視点を獲得できる。また一つの組織としてのあり方や役割の重要性と実際の保育現場で生かしていけるような学びも深めることができる。そのため、今後もこの活動を通して保育に関わる多くのことを学ばせていただいていることを忘れず、発達センターでの活動をより深く充実したものにしていけるよう、保護者の方、参加してくれる子どもたち、地域の方々、学生サポーター、指導してくださる先生方とたくさんの方の意見に耳を傾け、どの視点からも認めてもらえる組織になれるよう、精進していきたい。